

# ティンリン語、ネク語に見られる動詞類別接頭辞の 概念体系とイベント分類的機能<sup>(1)</sup>

大 角 翠

## 1. はじめに

ニューカレドニア先住民語のティンリン語とネク語にはある動詞接頭辞のグループがあり、特定の動詞語根と結合することによってしばしば非常に詳細で複雑な意味を持つ動詞を派生する。本稿ではこれらの動詞接頭辞(動詞類別接頭辞)を文法、意味、機能の観点から考察し、その連続した概念体系とイベント分類的機能を明らかにする。

本島とロワイヨテ諸島からなるニューカレドニアは南太平洋のメラネシア地域に位置する。そこでは 28 の先住民語と 1 つのクレオール言語、また公用語、共通語の役割を果たしているフランス語が話されている。先住民語は音韻的にも文法的にも非常に多様性に富むがこれらの言語の半数以上は話者数が千人に満たなく将来の存続が危ぶまれている。ティンリン語は主に本島南部のプティクリ、グランクリ部落、ネク語は本島中部のワウェ、モメア部落で話されており、話者数はそれぞれ 260 人と 221 人(1996 年の統計)である。

## 2. 動詞類別接頭辞

本稿で考察する動詞類別接頭辞は、北米インディアン語に見られる道具接辞<sup>(2)</sup>に非常に類似したもので、同様のものはパプア・ニューギニア南東部のオーストロネシア言語の中にも見つかっている(Ezard 1978, Bradshaw 1982, Lichtenberk 1983)。ニューカレドニアの言語ではティンリン語(Osumi 1995)で報告された他、幾つかの言語で存在が確認されている(Ozanne-Rivierre and Rivierre 2004)。これらの接頭辞は典型的には動詞に接辞付加し、身体部位や道具を用いた手段や、特定の動作などを示す<sup>(3)</sup>。

### 2.1 接頭辞と動詞語根の形態的特徴

本稿で考察するティンリン語とネク語の動詞類別接頭辞の中には上記の道具接辞と大変似かよったものが幾つも含まれるが、接頭辞、動詞語根として起き得る形態素の意味と機能、派生された動詞の意味構造は非常に特異なものがある。

次のネク語の例を見てみよう<sup>(4)</sup>。

ティンリン語、ネク語に見られる動詞類別接頭辞の概念体系とイベント分類的功能

- (1) *ẽ*            *dji-bai*            *mwâ-rẽ*            *na*            *?d̥ʔẽ*  
          3 単        足で-砕く        入れ物-水        主語        男  
          「男が水のビンを蹴って砕いた」

文(1)で、接頭辞 *dji-* は足を振り回して行われた動作を示し、動詞語根の *-bai* 「潰れている／砕けている」と結合することによって、*dji-bai* 「足で蹴って砕く」という意味の動詞を派生している。この2つの形態素は両方とも拘束形であるため、独立しては使われず、また *dji-* だけの意味を話者から聞き出すことはできない。語根と結合して初めて意味が顕在化するのである。ティンリン語の *f̃d̃-bwerr̃i* 「足で踏んで(何かを)隠す」の *f̃d̃-* も同様である。「足」を表す自立語は *hi* であり、形は全く異なる。日本語にも「足踏みする」という動詞があるが、その場合は自立語と同形の「足」が透明な形で動詞の一部をなしている。

ティンリン語、ネク語の動詞類別接頭辞はティンリン語で 34 個、ネク語ではほぼ 40 個が見つかっているが、ティンリン語ではそのうちの 28 個が、ネク語でも 28 個が拘束形としてのみ起きる。これらの接頭辞に結合できる動詞語根も限られており、ティンリン語では 25 個でその大半が拘束形、ネク語では 84 個でそのうちの 25 個が拘束形である<sup>(5)</sup>。拘束形の接頭辞であっても、類似の音を持つ自立語があるもの(その場合、接頭辞の形は自由形の語から派生し 1 音節に縮約されたと考えられるものが多い)と、類似した自立語は存在しないものとがある。これらの間の結合の可能性と意味、更には他の自由形の動詞や動詞接尾辞と結合できる 1 部の接頭辞の存在などは文法化のプロセスと関連した非常に興味深いものである (Osumi and Tsuji 2007)。ここでは詳しく触れないが、この形態、統語的特徴から、本来(自由)動詞の連結(verb serialization)であったものが再分析を経て拘束形同士の緊密な結合へと発達したのではないかと仮定できる。

## 2.2 派生動詞の概念構造

接頭辞部分で示される、原因となる行為と、動詞語根で示される結果状態の 2 つの部分を内包した派生動詞は次のように図式化できる。

- (2) 

CAUSE ＜類別接頭辞＞ Causer's action	-----	EFFECT ＜動詞語根＞ resultant situation
-------------------------------------	-------	---

*dji-bai* 「足で蹴って砕く」の概念構造は次のようなものとなる。

- (3) [**do**(swinging a leg)'(x,Ø)] CAUSE [BECOME **squashed**]'(y)]

派生された動詞には 2 つのイベントが複合されており、はじめの接頭辞の部分で使役者

(X)により特定のタイプの行為—(3)では足を振り回す動作—が、限定されない目的語(Ø)に対してなされ、後半で行為を被った目的物または人(y)がある状態—(3)では潰れた—に変化することが示される。限定されない目的語というのは、前半で示される行為が必ずしもはじめから特定の目的物に対して行われるとは限らないからである。例えば次の、動詞語根 *werri* 「現れる、きれいになる」が結合した例では、他動詞の形をとっているものの、(4)の接頭辞部分では「山崩れが土を押し流した」ということを意味し、目的語の「木」は、語根部分「現れる」の意味上の主語となっている。(5)も同様に、ぶつかった対象は「とうもろこし」ではない。

(4) *në-werri* 「山崩れで(何かが)現れる」

*ë*            *në-werri*            *be?ë*

3 単      山崩れ-現れる      木

「山崩れが起きてそこから木が現れた」

(5) *djô-werri* 「(車などを)ぶつけて(何かが)現れる」

*gô*            *djô-werri*            *iwa*

1 単      ぶつかる-現れる      とうもろこし

「私が(車で)(何かに)ぶつかったとたんにとうもろこしが(転がり)出てきた」

派生された動詞は通常は目的語をとり、他動詞として機能するが、ティンリン語の *mi-*、ネク語の *mâ-* 「ひとりでに」や少数の接頭辞は自動詞を派生する<sup>(6)</sup>。

## 2.3 動詞類別接頭辞の意味

ティンリン語、ネク語の動詞類別接頭辞が表す意味を更に詳しく考察してみよう。これらの接頭辞は前節で述べたように、なんらかの手段や動作が付随した行為を表し、動詞語根部分で示される結果状態へと続く役割を果たしている。ティンリン語とネク語の接頭辞は非常に認知的に似かよったシステムを持っている。大きくは道具と動作の観点から分類されるが厳密には1つの接頭辞の中に両方の要素が含まれる。

道具は材質、形状、機能の3つの意味領域が関連している。材質として、身体、無生物(道具)、自然物があり、道具は、木、金属、布などを材料とし、自然物には、火、空気(風)、水、土が含まれる。形状としては、物理空間的な長短高低、平たいか丸いか、太いか細いか、先端がとがっているか鈍いかなどが関連する。機能としては、道具として果たす役割、目的物に対する衝撃や影響力の大小がある。動作には、縦、横、カーブなどの方向性が示されているものや、加えられた力、スピードなどが暗示されるものもある。

ネク語の *de-* と *nyâ-* を例にとってみよう。この2つは両方とも「手」を用いた行為を指すが、*de-* は、「平手で」、*nyâ-* は「こぶしで」なされる行為であり、手の形状や機能が異

ティンリン語、ネク語に見られる動詞類別接頭辞の概念体系とイベント分類の機能

なっている。これらが同じ動詞語根-*jâ*「横に2つに割れる」と結合するとそれぞれ次のような意味となる。手段となる「手」の形状の違いによって、動作及び対象物は異なってくるわけである。

*de-jâ*「平手で叩いて横に2つに切る／割る(紙や箱など)」

*nyâ-jâ*「こぶしで殴って横に2つに切る／割る(木片や果物など)」

先に見た接頭辞 *dji-*の部分が単に、「足」を用いた手段だけを表すのではないことは、ネク語のもう1つの接頭辞 *tê-*の存在によっても裏付けることができる(ちなみに両者とも、「足」を意味する自立語の *djuâ* とは形式が異なり、動詞からこの部分だけを切りはなすことはできない)。表1はこの2つの接頭辞が付加した動詞を対照したものである。

表1. 接頭辞 *dji-*と *tê-*の付加した動詞

<接頭辞 <i>dji-</i> を持つ動詞の例>			
<i>dji-bwirri</i>	「蹴って(その対象を)失う」	<i>dji-bai</i>	「足で蹴って潰す」
<i>dji-irri</i>	「(木を)蹴って(果物を)採る」	<i>dji-jâ</i>	「足で蹴って2つに折る」
<i>dji-jajue</i>	「蹴ってひっくり返す」	<i>dji-jèrrê</i>	「足で蹴って粉々にする」
<i>dji-joai</i>	「蹴って(破片が)ばらまかれる」	<i>dji-ma</i>	「蹴り殺す」
<i>dji-mêâ</i>	「足で(袋を)開ける」	<i>dji-kirene</i>	「足を使って埋める」
<接頭辞 <i>tê-</i> を持つ動詞の例>			
<i>tê-ijâ</i>	「上を踏んで2つに折る」	<i>tê-bai</i>	「上を踏んで潰す」
<i>tê-jajue</i>	「踏んでひっくり返す」	<i>tê-kô</i>	「踏んで音を出す」
<i>tê-pri</i>	「踏んで(その対象が)くっつく」	<i>tê-ma</i>	「踏み殺す」
<i>tê-jèrrê</i>	「踏んで粉々にする」	<i>tê-pokaara</i>	「踏んで回す」
<i>tê-maa</i>	「踏んで土地をならす」	<i>tê-joai</i>	「踏み壊して飛び散らす」

上記の派生動詞を比べると、*dji-*も *tê-*も「足」を手段としているが、*dji-*は「足を用い、なおかつそれを振り回す行為」を表し、*tê-*は、「足で(何かを)踏んだり、上を歩いたりする行為」を表す。つまり2つの接頭辞には異なる動作が暗示されている。前者は瞬間的な動作であり、1つの対象に集中して向けられた行為、後者は点というより面に向かってある程度、継続して／繰り返してなされた行為であると認識することができる。

ネク語の *djô-*は通常、「棒、槍、かなてこ」などを使った行為を指すが、時として車やブルドーザー、更には人間の頭が道具として用いられる場合もある。はじめは、この接頭辞が2つないしは3つの別の同音意義の接頭辞として理解していたが、ネク語話者の認識では同じ接頭辞と考えているらしいことが分かった。これらの非常に異なって見える手段に共通してあるらしいものは、目的語に与える「衝撃の強さ」である。動詞語根の *-viaa* は、「(何かに)対して、反発して」という意味を持つが、*djô-*と結合すると *djô-viaa*「頭(や車)を何か(目的語)にぶつける」という意味の動詞を派生する。「盲目になる」を意味する *-bwi* が *djô-*と結合すると、*djô-bwi*「かなてこのような重い道具で突き刺して誰かを

盲目にする」という意味の動詞を生む。つまり、この接頭辞は、何らかの道具を用いて大きな衝撃を生む行為を暗示するといえる。

上の例を見ても道具の材質や形状は機能と大きく関連し、それは動作の方向性、力などの決定要因ともなる。接頭辞の動作的意味には、「縦に／横に振り下ろす、振り回す、縛る、押す、引っ張る、落ちる」や、自然物の「山崩れを起こす、日が当たる、風が吹く」などがある。

表2は接頭辞に含まれる手段の意味と動作の意味を並べて表にしたものである(抜粋)。

表2. ネク語動詞類別接頭辞の持つ身体／道具と動作の意味の相関

接頭辞	身体部分	動作としての意味
<i>bō-</i>	口	くわえる、噛む、食べる
<i>kājā-</i>	歯	くわえる、噛む
<i>dō-</i>	くちばし	突く、くわえる
<i>dji-</i>	足	ぶつける、振り回す
<i>tē-</i>	足	踏む、歩く
<i>taa-</i>	おしり	座る、押す
<i>nyā-</i>	こぶし	打つ、振り回す、押す
<i>de(i)-</i>	手	叩く、置く、振り回す
<i>kā-</i>	手、指	掴まえる、にぎる
<i>rā-</i>	手、腕	(遠くに)投げる
<i>puu-</i>	腕	横に振り回す
<i>bē-</i>	体	動く
接頭辞	身体部分と車、道具	動作としての意味
<i>tō-</i>	手、体、頭、車	押す
<i>pa-</i>	体の側、肩、車	ぶつかる、押す、落ちる
<i>djō-</i>	車、頭、金てこ、刀	ぶつかる、打つ、落ちる
接頭辞	道具	動作としての意味
<i>pwā-</i>	刀、斧	切る、振り下ろす
<i>jī-</i>	小さいナイフ	切る
<i>jō-</i>	斧、棒、刀	振り下ろす、打つ、(そばに)投げる
<i>ba-</i>	槍、重いもの	突く、ぶつかる
<i>buu-</i>	斧、棒	叩く、振り下ろす
<i>pi-</i>	ドリル、きり	突く、穴をあける
<i>ki-</i>	のこぎり	切る
<i>ka/ko-</i>	はさみ	切る
<i>tā-</i>	石、銃、かなてこ	投げる、撃つ、置く、落ちる
接頭辞	自然物	運動としての意味
<i>djō-</i>	水	流れる、運ぶ
<i>ku-</i>	風	吹く、押す
<i>kē-</i>	火	焼く

特定の道具を用いて行われる行為は大抵の場合、道具なしで、つまり手や足など身体部分だけを用いて行われるものとが並行して存在する。中には道具を使っても使わなくても良い行為を指すものもあるが、それらはネク語の *pa-*、*tô-* のように車に限られることが多い。*pa-* は、人(肩、側)が横から当たる、という場合と車が横から当たる、という時に使われる。車は手段というよりも人が中に乗っていることから身体と同一視されていると考えることができる。*djô-* については表にあるように、広範囲の道具が用いられうるが、「頭」が道具として起きると、「大きな衝撃がもたらされ、頭がぐらくらとなる」結果が暗示される。

## 2.4 動詞類別接頭辞の連続する意味の体系

表2で見たように、同様の動作、例えば「押す」という意味は幾つかの異なる接頭辞に含まれる(例：ネク語 *taa-* 「(おしりで)押す、座る」、*nyâ-* 「こぶしで打つ、押す」、*tô-* 「(手、頭や車で)押す」、*pa-* 「(体の側で)ぶつかる、押す」、*ku-* 「風が吹く、押す」)。

表3は、ティンリン語とネク語の類別接頭辞を意味の似かよっているものを隣り合わせにおいて、対照したものである。手段と動作は別々のものではなく、一体化したものとして捉えられ、またそれは次に挙げる幾つかの基本となる動作の上に、道具の形や機能、動作の方向や力などにより微妙な変数を与えられ意味の連続体を作り上げていることが分かる。

表3. ティンリン語とネク語の類別接頭辞と意味の連続

Tinrin	<i>tri-</i>	<i>ki-</i>	<i>sô-</i>	<i>e-</i>	<i>u-</i>	<i>te-</i>	<i>ho-</i>	<i>di-</i>	<i>e-</i>	-	<i>ô-</i>	<i>hô-</i>	-	<i>pô-</i>	-	-	<i>drô-</i>	<i>fô-</i>	<i>go-</i>	<i>rrô-</i>	<i>wa-</i>	-
Neku	-	<i>ki-</i>	<i>tî-</i>	<i>ru-</i>	-	-	-	-	<i>kâjâ-</i>	<i>bô-</i>	-	<i>kâ-</i>	<i>tja-</i>	<i>bi-</i>	<i>ki-</i>	<i>ne-</i>	<i>ja-</i>	<i>te-</i>	<i>bë-</i>	<i>taa-</i>	<i>tô-</i>	<i>ô-</i>
手段	手	鋸	棒	手	手	手	手	手	紐	歯	口	指	手	手	手	手	手	手	足	体	尻	手
様態	破る	引く	引く	引く	掘る	折る	結ぶ	繋ぐ	結ぶ	噛む	噛む	抓る	持つ	擦る	回す	回す	折る	押す	踏む	動く	押す	押す
方向				保つ	掘る				縛る	持つ	持つ	触る	触る	捻る			押す		歩く		座る	
基本動作	—引く—			—結ぶ—			—持つ—			—触る—			—回す—			—押す—			————→			
-	<i>jû-</i>	<i>kô-</i>	-	<i>de-</i>	<i>do-</i>	<i>tô-</i>	<i>pi-</i>	<i>sa-</i>	<i>pa-</i>	-	-	<i>sa/se-</i>	<i>ta-</i>	-	<i>dro-</i>	-	<i>wi-</i>	-	-	-	-	-
<i>këju-</i>	<i>ji-</i>	<i>ka/ko-</i>	<i>pa-</i>	<i>dji-</i>	<i>dô-</i>	-	<i>pi-</i>	-	-	<i>ba-</i>	<i>râ-</i>	<i>tâ-</i>	<i>de(i)-</i>	<i>puu-</i>	<i>nyâ-</i>	<i>jô-</i>	<i>buu-</i>	<i>puwâ-</i>	<i>djô-</i>			
足	刀	鉄	体(側)	足	嘴	針	錐	鶴嘴	棒、槍	棒、車	腕	石、銃	腕	腕	拳	刀、棒	棒	刀、銃頭	棒	棒	棒	棒
体	刃		肩、車			+尖	+尖	釘	+尖	金てこ		+飛ぶ				斧、釘	斧	棒、車	車	車	車	車
跳ぶ	切る	切る	当たる	蹴る	突く	突く	穴を	突く	突く	突き	投げる	投げる	叩く	叩く	殴る	叩く	振り	振り	ぶつかる			
	突く		横から	回す			あける	掘る		刺す				触る	水平		下に	下ろす	下ろす	速い		
————→	—突く—			—掘る—			—突き刺す—			—投げる—			—振り下ろす—			強く当たる						

### [自然物]

Tinrin	<i>ko-</i>	<i>vo-</i>	<i>mi</i>	-	<i>dre-</i>	<i>nrô-</i>	-	-	-
Neku	-	-	<i>mâ-</i>	<i>tê-</i>	-	<i>ně-</i>	<i>ku-</i>	<i>djô-</i>	<i>kê-</i>
手段	胃	腸	内的力	日光	重力	山崩れ	風	水、川	火
様態	吐く	排泄する	～に	触る	落ちる	落ちる	吹く	流れる	焼ける
方向	掘り出す		なる	着く					
	—掘り出す—		—着く—		—落ちる—		—押す—		無くなる

●引く張る＞保持する＞触る＜押す＜圧迫する＜刺す＜投げる

このようにティンリン語、ネク語の動詞類別接頭辞は単なる手段を動詞の意味に追加するものではなく、手段と動作が一体化した1つのイベントを表しており、動詞語根と結合することによって2.2 で見たような複合的な動詞構造を生み出している。

### 3. 動詞語根

類別接頭辞と結合しうる動詞語根は、「移動した、変形した、壊れた、怪我した、現れた、消えた」などの主語や目的語の結果状態を表すものと、行為の結果、「うまく行った、失敗した」などの評価を表すものがある。それらは次の4つにまとめられる（表4参照）。

- ① 姿勢(posture)、配列(configuration)、移動
- ② 形状の変化
- ③ 物理的ないし精神的な影響をこうむった状態
- ④ 結果の評価<sup>(7)</sup>

④の結果の評価を表す動詞語根は、形態、統語的にここで述べられている他の動詞語根と同じふるまいをするが、他の動詞語根とは意味の点で少し異なる。このグループの動詞語根が暗示するものは、行為についての話者の肯定的ないし否定的な評価である。同時に目的語の物理的変化を表す場合もある。次のネク語の *-tja* は、ある行為が間違った場所や目的語になされ、目的が遂げられなかったという否定的な評価を表している。

- (6) *de*                      *ba-tja*                      *nō*  
1 複. 包含              鋸で-それる              魚

「私たちは魚を鋸で刺そうとしたが取り逃がした」

それぞれの意味は次の変数と極性により細分化され、類別接頭辞と同様、連続した概念の体系を作っている。例えば、ネク語の *-tō* 「押された」→*-rene* 「閉じた」→*-bwirri* 「失われた」も連続した概念であると考えられる。語根の意味は接頭辞の暗示する行為と、次にくる目的語の性質によって更に意味が限定される。

- 力、効果：無→大、大きな衝撃
- 空間移動：無→大→四方に拡散
- 形状：無変化→変化、変形、破壊→消滅
- 極性：肯定的⇔否定的、乾⇔湿、閉じた⇔解放した、掘り出された、出現⇔消滅



表 4. 動詞語根で表される結果状態

① 姿勢(posture)、配列(configuration)、移動

動詞語根	意味	場所、力、変化
-bë, -rĩrĩ (N)	動く、揺れる	同じ場所 振動
-nô (T) -jajue, -pokaara, -taji (N)	回る、ひっくり返る	同じ場所 姿勢・配列の変化
-via, -piri, -wũrrũ (T) -viaa, -pri, -wirri, -tô (N)	くっつく、押される	同じ場所 圧力
-bwerrĩ, -trẽrrẽ (T) -rene, -kirene, -bwirri (N)	閉じる、埋まる、消える	圧力 消失
-tua (N)	落ちる	重力下方
-irri, -derari, -mai, -djô, -karẽ (N)	離れる、拡散する、流れる 進む	遠くへ移動
-rau (T) -kwi, -wi, -kerre, -tĩ, -maa, -werri, -mvaa (N)	引っ張る、掘り出される 抜かれる、(火が)点く	出現

② 形状の変化

-mêâ, -sârrĩ (T), -mêâ, -kẽrrĩ (N)	開く、ほどける 伸びる	少しの引っ張りと変形
-gidhi, -ghai (T) -jaghũjũ, -biwa, -jorra (N)	皺になる、ゆがむ 柔らかくなる	圧力で少し変形
-so, -bôrô (T) -bi, -rôô, -te, -pwero, -purĩ, -perri (N)	曲がる、丸められる	圧力で曲がる 変形
-dôwô, -mârrâ (T) -rurru, -ghe (N)	突き通される、壊れる 割れる	一か所への圧力 大きな変形
-rũ, -ria (T) -jâ, -tia, -wa (N)	2つに切れる、壊れる	一か所への圧力 大きな変形
-ghorro (T) -moa, -jẽrrẽ, -bai, -taa, -rai (N)	割れる、粉々になる	継続した／繰り返された 圧力、強い効果
-joai (N)	破裂した	強い圧力 広い面に分散

③ 物理的ないし精神的な影響をこうむった状態

-tĩbë, -rĩrĩ (N)	驚いた、揺れた	衝撃
-kô, -têâ (N)	音を立てる	物理的效果
-mëë, -di (N)	乾いた、濡れた	物理的状況変化
-ghe, -sôrrô, -be (T) -pei, -rẽrrẽ, -bwi, -ma (N)	傷ついた、盲目になった 死んだ	傷害



④ 結果の評価

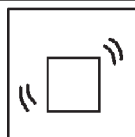
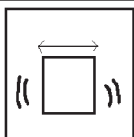
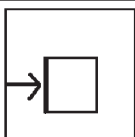
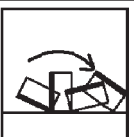

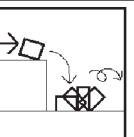
<i>-harrũ</i> (T) <i>-vũrrẽ</i> (N)	中心に当たる	当たる、成功
<i>-dhai</i> (T) <i>-tja, -warri</i> (N)	間違ったところに当たる それる、逃す	的をそれる 失敗
<i>-(v)eso</i> (T)	無駄に終わる	浪費
<i>-mirrinyô</i> (N)	ダメにする	損なう
<i>-pwũrrũ, -be</i> (T) <i>-bwirri, -ma</i> (N)	失う	的を失う 消える

(注) (T)はティンリン語、(N)はネク語

表5は、姿勢、配列や場所の変化、及び、形状の変化を表す動詞語根の幾つかの例を図式化したものである(Tsuji 2007)。

表5. 動詞語根の表す意味の連続

〈姿勢、配列や場所の変化〉

<i>-bě</i>	<i>-rĩrĩ</i>	<i>-tô</i>	<i>-pokaara</i>	<i>-jajue</i>	<i>-taji</i>
動いた	揺れた	押された	ひっくり返った	ひっくり返りこぼれた	転がり落ちた
					
動き		移動	姿勢	配列の変化	
力、効果の増大→					

〈形状の変化〉

<i>-te</i>	曲がった 折れた	 → 
<i>-rôô</i>	挫いた 丸く曲がった	 → 
<i>-pwesto</i>	丸くなった	 → 
<i>-purri</i>	丸められた	 → 
<i>-kĩrri</i>	平らにされた	 → 

#### 4. 派生動詞

動詞類別接頭辞は表3で見たように非常に詳細に分化した意味を表し、動詞の語根で示される結果状態と組み合わせることで複合的な意味を持つ動詞を派生することはすでに述べた。例えば、ティンリン語とネク語には、単純に「殺す」という意味を持つ語はない。ティンリン語の動詞 *ta* はそれに近いが、通常は「叩く」という意味で、コンテキストにより「殺す」という意味になったり、「触る」という意味になったりする。同様に *vajɛ̃* という語は「病気である」という意味にも、「死んだ」という意味にも用いられる。日本語や英語の話者には「死んでいる」と「生きている」ことは非常に異なるように感じられるが、この2つの言語では単語の上では厳密な区別は無いということだ。しかしながら、これまでに見たように、動詞類別接頭辞と、動詞語根 *-be* を結合させることにより非常に多様化した「死に至る(または、火が消える)行為」を表現することができる：

<i>ebe</i>	「噛み殺す」	<i>ɔbe</i>	「灯を(手を使って)消す」
<i>wibe</i>	「殴り殺す」	<i>drebe</i>	「落ちて死ぬ」
<i>paebe</i>	「刺し殺す」	<i>tabe</i>	「叩いて(火を)消す」

2.2で考察したように、この派生動詞は原因から結果にいたる複合的なイベントを表しているため、動詞自体は完了相を持つ。自動詞に類別接頭辞が付加した場合は、結合価を増やす。接頭辞部分の意味上の主語は意図を持って行為を行うことが多いが語根部分で示される結果はもとの行為と無関係なものを主語にとる場合もあり、意図的な行為である必然性はない。次の文では前半部分で示される行為は「意図的に」なされたものであるが、後半ではこの行為が「目的を遂げられなかった」ことを表している。

- (7) *nrā dro-dhai Toni*  
 3単 拳-失敗 トニー  
 「彼はトニーを殴り損ねた」

接頭辞と動詞語根の結合はおのずと意味的制限をとまっている。例えば、ティンリン語の *ko-*「吐く」、*vo-*「排便する」は、胃や直腸が空にされる、ということから、*-rau*「掘り出される」とのみ結合できる。

接頭辞が付加した動詞では、接頭辞部分で暗示する手段が身体か道具か、どのような材質のものかなどに関連して目的語が制限され、また同時に語根部分で暗示する結果状態から、それが可動なものか、壊したり潰したりできるものか、驚いたり傷ついたりするものかなどの条件が付与される。例えば接頭辞 *bɔ-*「口で、くわえる」は通常 *-maa*「開墾された」と意味的に結合することは難しいと思われるが、実際には次の例にあるように *bɔ-maa*「(馬が)口で荒れ地を(草を食べて)きれいにした」という語を生み出すことができる。

(8) *ê*            *bô-maa*            *djerri*            *na*            *ôji*

3 単      口で-開墾した      土地      主語      馬

「馬が荒れ地の草を食べて(地面を)きれいにした」

このように接頭辞と動詞語根部分の2つが組み合わさり、なおかつ目的語が選ばれてはじめておのおのの部分の輪郭がはっきりと見えてくるといえる。2.3 で見たネク語の接頭辞 *djô-* も同様である。

派生動詞には次のようなものがある(抜粋)。

<ティンリン語>

<i>u-rû</i>	「手で2つに割る」	<i>u-so</i>	「手で曲げる」
<i>u-nô</i>	「手でひっくり返す」	<i>e-rû</i>	「歯で2つに切る」
<i>e-ghe</i>	「噛んで傷つける」	<i>e-be</i>	「噛み殺す」
<i>dro-ghe</i>	「こぶしで殴って傷つける」	<i>tô-ghe</i>	「針で刺して傷つける」
<i>tô-trêrrê</i>	「針などで穴をあける」	<i>pa-ebe</i>	「石で打って殺す」
<i>dre-rû</i>	「落ちて2つに割れる」	<i>dre-ghe</i>	「落ちて傷つく」
<i>dre-be</i>	「落ちて死ぬ」	<i>sô-ghe</i>	「矢などで傷つける」
<i>sô-rau</i>	「引っ張って抜く」	<i>sô-nô</i>	「引っ張ってひっくり返す」

<ネク語>

<i>kâjâ-tia</i>	「歯で2つに切る」	<i>kâjâ-ghe</i>	「噛んで傷つける」
<i>kâjâ-ma</i>	「噛み殺す」	<i>de-ma</i>	「手で殺す」
<i>nyâ-tia</i>	「こぶしで殴って割る」	<i>pwâ-ma</i>	「刀で殺す」
<i>nyâ-ma</i>	「こぶしで殴り殺す」	<i>pwâ-tia</i>	「刀などで2つに割る」
<i>pwâ-mêâ</i>	「木や刀で叩いて開ける」	<i>ru-jâ</i>	「引っ張って壊す」
<i>tâ-tia</i>	「落として2つに割る」	<i>tâ-jêrrê</i>	「落として粉々に割る」
<i>ru-tia</i>	「引っ張って破る」	<i>ru-mêâ</i>	「引っ張って開ける」
<i>de-pokaara</i>	「手で叩いて相手の顔の向きをかえる」		

## 5. 結 論

本稿ではティンリン語、ネク語の動詞類別接頭辞を、形態、意味、統語の面から考察し、これらの接頭辞が基本的な動作<引っ張る~持つ~保つ~押す~投げる>に、手段(身体および道具)や様態を伴った連続的な概念の体系をなしていることを明らかにした。これまで北米インディアン語などに見られた道具接辞<sup>(8)</sup>とは異なり、同じ道具を用いながら異なる動作を伴う接頭辞も検証された。また、同じ動作を表しながら、素手で行うものと道具を用いて行うものがしばしば並存することが分かった。これらと結合できる動詞語根の部分もまた、非常に多彩で詳細な意味を持ち、接頭辞部分のイベント分類的機能とあいまって、一連の複合的な出来事を表す動詞を派生している。結果状態の中には、位置や形状の変化のみならず、結果に対する話者の評価を表すものも見出された。

ティンリン語、ネク語に見られる動詞類別接頭辞の概念体系とイベント分類の機能

派生動詞のとり主語や目的語の制限や性質、ないしは語根部分の意味により接頭辞部分の潜在的意味がどのくらい拡張しうるのか、基本となる動作や様態はどの程度普遍的なものであり、どのような体系を持っているか、一般の動詞のカテゴリーと、この一連の派生動詞はどのような関係にあるのかなど、今後の課題は多い。2.1 で論じた接頭辞と語根の間の結合の可能性と意味の問題に関しては、動詞連結との歴史的つながりを明らかにする意味で、メラネシアの他の同様の接頭辞を比較研究する必要があると思われる。

本稿で考察した動詞類別接頭辞やそこから派生した動詞は、動詞内部の意味構造をかなり透明に提示し、同時にこれらの言語の話者の発想や関心のあり方に我々の興味をひきつける。動詞は一般に発話の核心的な部分にあり、どの言語でも基本的な動作、行為は同じように語彙化していると思いがちである。しかし、何かを「切る、叩く、潰す、開ける」や、誰かを「殺す」といった動詞は日本語や英語では1つの動詞で示されるのに対し、ティンリン語やネク語では非常に分析的で緻密な、時には数多くの動詞の形をとる。これらの動詞は本稿で考察したように、原因となる行為と結果という2つの事象を含む複合的な意味を持つ語彙となって現れる。これらの動詞は表面的には特殊に見えるが、我々の概念体系の普遍性を探るてがかりとなる。

類別接頭辞が身体部分の意味を含む時、動作主は通常それらの所有者である。道具は総称的に用いられるので、「この道具で(花瓶を)砕く」というような「特定の」道具を指すことはできない。その場合は、ティンリン語だと *nri* という前置詞を用いて別の構文で表現しなければならない。類別接頭辞が付加した動詞と、接頭辞のついていない動詞の関係、一方の動詞を他の動詞を用いてパラフレーズした場合に生まれる意味のずれなども今後検討する必要があるだろう。

付表：動詞類別接頭辞

<ティンリン語>

<i>de-</i>	「振り回して、吊って」	<i>dì-</i>	「ピン、ひもで」
<i>do-</i>	「くちばしで」	<i>dre-</i>	「落として」
<i>dro-</i>	「こぶしで」	<i>drô-</i>	「下に押さえつけて」
<i>e-</i>	「掘って」	<i>e-</i>	「歯で」
<i>fô-</i>	「足で」	<i>go-</i>	「動いて」
<i>ho-</i>	「くっつけて」	<i>ho-</i>	「逃げて」
<i>hô-</i>	「掴んで」	<i>jû-</i>	「ナイフで」
<i>ki-</i>	「のこぎりで」	<i>ko-</i>	「吐いて」
<i>kô-</i>	「はさみで」	<i>mi-</i>	「ひとりでに」
<i>nrô-</i>	「地すべりして」	<i>ô-</i>	「指で」
<i>pa-</i>	「とがったものや石で」	<i>pi-</i>	「きりで」
<i>pô-</i>	「回して」	<i>rrô-</i>	「上に座って、押さえつけて」
<i>sa-/se</i>	「投げ下ろして」	<i>sô-</i>	「引っ張って、捕まえて」
<i>ta-</i>	「叩いて、押して、触って」	<i>te-</i>	「縛りつけて」
<i>tri-</i>	「破って」	<i>tô-</i>	「針や槍で」
<i>u-</i>	「手で」	<i>vo-</i>	「排泄して」
<i>wa-</i>	「下に押して」	<i>wi-</i>	「(先の丸い)棒で」

<ネク語>

<i>ba-</i>	「ぶつかって、槍で」	<i>buu-</i>	「叩いて、斧、棒で」
<i>bě-</i>	「動いて」	<i>bô-</i>	「口で、くわえて、噛んで」
<i>bi-</i>	「回して」	<i>dî-</i>	「吸って」
<i>de(i) -</i>	「手で、叩いて」	<i>dji-</i>	「足で、回して」
<i>djô-</i>	「車、頭で(大きな衝撃)」	<i>dô-</i>	「くちばしで」
<i>ja-</i>	「押して、捕まえて」	<i>ji-</i>	「(小さいナイフで)切って」
<i>jô-</i>	「斧、棒、刀を振り下ろして」	<i>ka/ko-</i>	「はさみで」
<i>ki-</i>	「カギで」	<i>ki-</i>	「のこぎりで」
<i>ku-</i>	「風で、吹いて」	<i>kâ-</i>	「手で掴まえて、にぎって」
<i>kâjâ-</i>	「歯で」	<i>kê-</i>	「焼いて」
<i>mâ-</i>	「ひとりで」	<i>nyâ-</i>	「こぶしで」
<i>pi-</i>	「ドリルで、きりで」	<i>puu-</i>	「腕を横に振り回して」
<i>pwâ-</i>	「刀、斧で切って」	<i>ro-</i>	「ナイフで切って、槍で」
<i>ru-</i>	「引っ張って」	<i>râ-</i>	「遠くに投げて」
<i>rê-</i>	「ナイフで切って」	<i>taa-</i>	「上に座って、おしりで」
<i>tâ-</i>	「石を投げて」	<i>tê-</i>	「足で、上を歩いて」
<i>tô-</i>	「強く押して」	<i>ô-</i>	「身体で」

動詞語根

<ティンリン語>

- <i>(v) eso</i>	「むだになった」	- <i>be</i>	「死んだ 消えた」
- <i>bwerri</i>	「閉じた」	- <i>bôrô</i>	「へこんだ、折れた」
- <i>dhai</i>	「あたらなかった」	- <i>dôwô</i>	「穴が開いた」
- <i>ghai</i>	「潰れた、混ざった」	- <i>ghe</i>	「怪我した、壊れた」
- <i>ghorro</i>	「粉々になった」	- <i>gidhi</i>	「くしゃくしゃになった」
- <i>mârrâ</i>	「パチッと割れた」	- <i>mêâ</i>	「開いた」
- <i>nô</i>	「ひっくり返った」	- <i>piri</i>	「きつく押しつけられた」
- <i>rau</i>	「掘り出された」	- <i>ria</i>	「縦に2つに割れた、壊れた」
- <i>rû</i>	「横に2つに割れた」	- <i>so</i>	「曲がった」
- <i>sârrî</i>	「ほどけた」	- <i>sôrrô</i>	「傷ついた」
- <i>trêrrê</i>	「埋まった」	- <i>via</i>	「押さえつけられた」
- <i>wûrrû</i>	「押された、搦った」		

<ネク語>

- <i>tia</i>	「2つに切れる、割れる」	- <i>rai</i>	「砕けた」
- <i>bai</i>	「潰れた」	- <i>bwi</i>	「盲目になった」
- <i>bwirri</i>	「失した、迷子になった」	- <i>ghê</i>	「怪我をした(2例のみ)」
- <i>irri</i>	「(果物が)摘まれた」	- <i>jâ</i>	「2つに切られた」
- <i>jajue</i>	「倒れてこぼれた」	- <i>jêrrê</i>	「粉々になった、砕けた」
- <i>joai</i>	「破裂した」	- <i>kirene</i>	「埋まった」
- <i>kîrrî</i>	「伸びた、張った」	- <i>kô</i>	「音をたてた」
- <i>ma</i>	「死んだ」	- <i>maa</i>	「開墾された」
- <i>mêâ</i>	「開いた」	- <i>mirrinyô</i>	「邪魔された」
- <i>moa</i>	「破れた」	- <i>mwaa</i>	「(火が)点いた、生きた」
- <i>pokaara</i>	「向きが変わった」	- <i>pri</i>	「押し付けられた、閉まった」
- <i>rai</i>	「潰れた、粉になった」	- <i>rene</i>	「閉まった」
- <i>rîrrî</i>	「震えた」	- <i>rôô</i>	「くじいた、ひっくり返った」
- <i>urru</i>	「穴が開いた」	- <i>tja</i>	「すべった」
- <i>taji</i>	「落ちて壊れた」	- <i>têâ</i>	「泣いた」
- <i>tia</i>	「2つに割れた」	- <i>tîbê</i>	「驚いた」
- <i>tô</i>	「押された」	- <i>tua</i>	「落ちた」
- <i>viaa</i>	「押さえられた」	- <i>vûrrê</i>	「的にあたった」
- <i>wa</i>	「縦に2つに割れた」	- <i>warri</i>	「的にそれた」
- <i>wi</i>	「掘り起こされた」	- <i>wirri</i>	「しっかりついた」

## 文例

ẽ tẽ-tja ărră 「彼は歩いていて石の上ですると滑った」  
 ıra-inyô ẽ kâ-mirrinyô pârră-inyô 「私の子は私の髪をさわってくしゃくしゃにした」  
 ẽ nyâ-bwirri jô 「彼は私をこぶしで殴ったので頭がふらふらした」  
 ẽ bo-maa djerri na oji 「馬が地面の草を食べてきれいにした」  
 rri taa-maa djerri 「いつも人が座っているので地面の草がなくなった」  
 ẽ ba-pokaara rroto 「彼は車を衝突させ、車はひっくり返った」  
 ẽ bô-warri sîbẽ na taaki 「犬はねずみを噛もうとしたが、横を噛んでしまった」  
 ẽ tô-wirri bobo-ıra-ghiẽ 「彼は自分の子のけがの上を濡らした布でしっかり押さえた」  
 ẽ kâyâ-pri sîbẽ na taaki 「犬はねずみを歯でしっかりくわえて放さない」  
 ẽ kâ-rene taba 「彼は世話になったのでタバコをお礼に差し出した」  
 ẽ mâ-viaa na be?ẽ 「(幹が割れていた)木がひとりでにまた閉じた」  
 ẽ taa-rai nga-taaki 「彼は犬の糞の上に座ってしまった(糞が潰れた)」  
 ẽ tâ-mvaa mwâ-wêji ro wîbẽ 「彼はウインペー族に長男を授けた(子を生んで氏族を絶やさなかった)」

## 注

- (1) 本論文は、第3回オクスフォード神戸セミナー(及び一部、第7回国際オセアニア言語学会)で辻笑子氏と共同発表した内容をもとに翻訳、加筆、修正したものである。本研究で用いたティンリン語の資料は Osumi 1995、及び 2000、2001 年の現地調査から、ネク語の資料は 2001 年から 2007 年にかけてのワウェ部落での現地調査と 2006 年の辻氏の現地調査で得られたものである。ネク語を教えてくれた現地の人々、特にルイ、ウジェニー、ジゼル、ギュスターブ、オーギュスティン、及び研究・調査の上で協力くださった辻笑子氏、現地での滞在中お世話になったルイーザ、ルバイ勝子、アニエス他の方々に感謝する。2001 年からの現地調査は、文部省科学研究費助成(1203940、16520261、19520366)により可能となり、また、2004 年から 2007 年の 3 年間は東京女子大学比較文化研究所から個人研究助成金を得た。ここに謝意を表したい。
- (2) Instrumental affixes. Sapir 1930, Miyaoka 1992, Talmy 1985, Mithun 1999 を参照のこと。
- (3) これらは語彙の意味がかなりはっきりしているものとそうでないものがある。はっきりしているものの中には、台湾のブヌン語などに見られる語彙的接頭辞(lexical prefixes)(Nojima 1996)と類似しているものがあるため、それらと同様に扱われる場合があるが、幾つかの点で異なっている。語彙的接頭辞の場合、数はしばしば非常に多く、1、2 の動詞語根だけに結合する非生産的なものも珍しくない。
- (4) 本稿で用いた文字表記のうち特殊なものは次の通り。  
 ・発音：母音 > ẽ[ɛ], ô[ɔ], û[ɯ], (N): î[y], ë[ə]。鼻母音 > i, û, â, ô, ê[ɛ と e] の鼻音、(T): ü[ɯ] の鼻音。子音 > (T): t, d, n は歯音、tr, dr, nr, rr はそり舌音、s[ʃ], dh[ð], gh[ʁ], mw[mʷ], pw[pʷ], bw[bʷ], kw[kʷ], gw[gʷ], mw[mʷ]。次の音は T では前鼻音化音である：b, bw, g, gw, d, dr, (N): dj[dʒ]。(N): r は巻き舌、rr はそり舌、ny[n̠], ng[ŋ], ch[tʃ], dj[dʒ], j は摩擦音。  
 ・省略記号 > 1, 2, 3 ‘1, 2, 3 人称’、単 ‘単数’、複 ‘複数’、包含 ‘複数包含形’、主語 ‘主語標識’、所有 ‘所有辞’、T ‘ティンリン語’、N ‘ネク語’。
- (5) 類別接頭辞とそれに結合できる動詞語根の数は今後調査により更に増える可能性はある。



ティンリン語、ネク語に見られる動詞類別接頭辞の概念体系とイベント分類的機能

- (6) 例：ティンリン語 *nrâ mi-ghorro nrâ mwâ rrê arrôd* (3 単、ひとりでに-砕けた、主語、ビン、所有、水)「水のビンが落ちて砕けた」、ネク語 *gô dji-rôd* (1 単、足で-挫いた)「私は(自分で)蹴って足を挫いた」、*kaniâ taaki i kēju-mai* (たくさん、犬、3 複、跳ねる-散らばる)「たくさんの犬が飛び跳ねてばらばらに去った」。
- (7) Osumi 2006 を参照のこと。
- (8) 他の 11 の言語、バプア・ニューギニアの Tawala, Nimowa, Sudest, Iamalele, Manam、ニューカレドニアの Tinrin, Neku, Xârâcùù、北米の Haida, Lakhota, and Atsugewi 語を調べたところ、類似した形態素が多いことが分かった。括弧内は類似の接辞を持つ言語の数である (Osumi and Tsuji 2006)。
- 足・足先 (11) > 歯・口 (11) > 手 (9) > 拳 (4)、指 (4)、声 (4)、尻 (4)
  - ナイフ・切る (8) > 尖った物・刺す (6) > のこぎり (4)、槍・棒 (4)
  - 火・燃える (7) > 内的力 (7) > 風・吹く (5)
  - 打ち下ろす (8) > 引っ張る (6)、押す (6) > 投げる (5) > 動く (4)

#### 参考文献

- Bradshaw, Joel. (1982). *Word Order Change in Papua New Guinea Austronesian Languages*. Doctoral dissertation, University of Hawai'i.
- Ezard, Bryan. (1978). 'Classificatory Prefixes of the Massim Cluster.' In S.A. Wurm and Lois Carrington (eds). *Second International Conference of Austronesian Linguistics Proceedings*, Fascicle 1, *Western Austronesian*. Pacific Linguistics, C-61. Canberra: Australian National University, 1159-1180.
- Lichtenberk, Frantisek. (1983). *A Grammar of Manam*. Oceanic Linguistics Special Publication 18. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Mithun, Marianne. (1999). *The Language of Native North America*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Miyaoka, Osahito. (1992). *Kita no Gengo: Ruikei to Rekishi*. Tokyo: Sanseido.
- Nojima, Motoyasu. (1996). 'Lexical Prefixes of Bunun Verbs,' *Gengo Kenkyuu*, 110, 1-27.
- Osumi, Midori and Tsuji, Emiko. (2006). 'Morpho-semantic structures of classificatory prefixes in Tinrin and Neku,' *Poster presented at Third Oxford-Kobe Linguistic Seminar International Symposium*. St Catherine's College (University of Oxford) Kobe Institute.
- Osumi, Midori. (1995). *Tinrin Grammar*. Hawai'i: University of Hawai'i Press.
- Osumi, Midori. (2006). 'Result-evaluation in grammar: a preliminary survey,' *Paper presented at 2nd Conference on the Syntax of the World's Languages*, Lancaster University.
- Osumi, Midori and Emiko Tsuji. (2007). Combinatory subclasses in Tinrin/Neku event-classifying morphemes and their semantic motivations, *Paper presented at the 7th International Conference on Oceanic Linguistics*.
- Ozanne-Rivierre, Françoise and Rivierre, Jean-Claude. (2004). 'Verbal Compounds and Lexical Prefixes in the Languages of New Caledonia.' In Isabelle Bril and Françoise Ozanne-Rivierre (eds). *Complex Predicates in Oceanic Languages*. Mouton de Gruyter. 347-371.
- Sapir, Edward. (1930). 'Southern Paiute, a Shoshonean Language.' *Proceedings of the American Academy of Arts and Sciences* 65(1).
- Talmy, Leonard. (2000). *Toward a Cognitive Semantics: Typology and Process in Concept Structuring*, Vol. 2. Cambridge: The MIT Press.
- Talmy, Leonard. (1985). 'Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms,' In

- Timothy Shopen (ed.). *Language Typology and Syntactic Description* vol 1.
- Tsuchida, Shigeru. (1990). 'Classificatory prefixes of Tsou Verbs,' *Tokyo Daigaku Gengogaku Ronshuu* '89, 17-52.
- Tsuji, Emiko. (2007). *Verb Structure in Neku: A study of verbs affixed with classificatory prefixes*. M.A. Thesis, Tokyo Woman's Christian University.
- Van Valin, Robert. (2001). *An Introduction to Syntax*. Cambridge: The Cambridge University Press.

〔現代文化学部教授(言語学・オセアニア言語) 2004～06 年度個人研究員〕